第3回

鞠智城跡（きくち）「特別研究」成果報告会

発表レジュメ集

平成27(2015)年

3月14日(土)

10:30～16:10（受付は10:00～）

くまもと県民交流館パレア・パレアホール

主催：熊本県教育委員会　後援：水城・大野城・基肄城1350年事業実行委員会　熊本県文化財保護協会

鞠智城（きくち）跡 第3回

「特別研究」成果報告会

平成27(2015)年
3月14日(土) 10:30～16:10

くまもと県民交流館パレア・パレアホール
（テトリアくまもとビル10F）

開会
10:30～11:10
挨拶・趣旨説明

報告1
11:10～11:50
「西海道の軍事環境からみた鞠智城の機能」
五十嵐 基善（明治大学大学院博士後期課程）

休憩
11:50～13:00
休憩

報告2
13:00～13:40
「8世紀における古代山城の展開と官衙・寺院」
清田 美季（京都大学大学院博士後期課程）

報告3
13:40～14:20
「古代朝鮮半島と肥後地域の交流史からみた鞠智城
—鞠智城の築城背景と役割を探る—」
近藤 浩一（京都産業大学非常勤講師）

休憩
14:20～14:30
休憩

報告4
14:30～15:10
「鞠智城地域と大宰府－古代の地方行政と西海道－」
西本 哲也（東京大学大学院博士後期課程）

報告5
15:10～15:50
「石積技術からみた古代山城築造集団の研究」
南 健太郎（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター助教）

講評
15:50～16:10
岡田 茂弘（国立歴史民俗博物館名誉教授）
佐藤 信（東京大学大学院教授）

第３回鞠智城跡「特別研究」成果報告会＠くまもと県民交流館パレア　2015/03/14

西海道の軍事環境からみた鞠智城の機能

明治大学大学院博士後期課程　五十嵐 基善

はじめに

◇ 天智２年（663）、倭国は**白村江の戦い**で大敗を喫し、百済復興の軍事行動に失敗する

➡ 唐・新羅の侵攻に備えるため、西日本に**古代山城による防衛体制**を構築

… 大部分の古代山城は廃止され、８世紀前期までに防衛体制は変質・転換

➡ しかし、**大野城・基肄城・鞠智城**は長期間にわたり維持されたことが特徴

…［大野城］・［基肄城］拠点である大宰府は軍事施設・自然地形により防衛

…［鞠智城］**長期間にわたり維持された理由は必ずしも明確ではない**

◇ 鞠智城が維持された理由は、**長期的な視野**で分析する必要がある

➡ 鞠智城の機能については、坂本経堯氏が提示した見解が起点となる【坂本 1937】

…**［見解 1］有明海の防衛**、**［見解 2］大宰府の支援**、**［見解 3］隼人支配の拠点**に集約

➡ 考古学の発掘成果による［第Ⅰ期］～［第Ⅴ期］の変遷【熊本県教委 2012】

［第Ⅰ期］	７世紀第３四半期 ～ ７世紀第４四半期	**古代山城の機能**
［第Ⅱ期］	７世紀末 ～ ８世紀第１四半期前半	
［第Ⅲ期］	８世紀第１四半期 ～ ８世紀第３四半期	
［第Ⅳ期］	８世紀第４四半期 ～ ９世紀第３四半期	**倉庫施設の機能**
［第Ⅴ期］	９世紀第４四半期 ～ 10 世紀第３四半期	

＝ **８世紀後期以降、鞠智城の主な機能は稲穀の貯蔵・保管に転換**【能登原 2014】

【本研究の目的】鞠智城は本質的には軍事施設であるため、軍事機能が脱落していく過程を明確にする必要がある。 そこで、西海道の軍事環境を分析することにより、鞠智城が果たした軍事的機能を明確にし、長期間にわたり維持された理由を解明することを試みる。

１：西海道の軍事環境について

西海道が直面した軍事問題は、**対外防衛問題**と**対隼人問題**に集約され、秩序を維持する上で適切に対応しなくてはならなかった。本章では、これらの軍事問題の概要を整理することにより、鞠智城の機能を考える上での基礎的な作業を行なう。

(1) 設置期における鞠智城の機能

鞠智城は白村江敗戦により築城され、本質的には**対外防衛**を行なう上での軍事施設

➡ **菊池川中流**に位置する鞠智城は、河口から直線で北東方向に**約 27km 内陸**に位置する

…**［見解 1］有明海の防衛**（鞠智城からは有明海の状況を可視的に把握できない）

➡ 鞠智城の設置背景には、菊鹿盆地の**高い生産力**との関係が想定【佐藤 2010】

…**［見解 2］大宰府の支援**（発生しなかったため想定される機能、本研究では除外）

➡ 鞠智城内には広い平坦地があり、**米穀の効率的な貯蔵**が可能という特性
… ［見解 1］・［見解 2］は否定できないが、生産力との関係を重視するのが妥当か

(2) 対外防衛問題・対隼人問題の概要

8・9 世紀における西海道は、対外防衛問題と対蝦夷問題に直面した

➡ **対外防衛問題**は対象を変えながら、**長期間**にわたり存在した軍事問題
… ［8 世紀］日本と新羅の外交が不安定となり、**新羅**を意識した対外防衛が展開
… ［9 世紀］**新羅海賊**による被害が発生し、8 世紀とは異なる状況が発生

➡ **対隼人問題**は白村江敗戦後に現出するが、軍事的緊張は短期間で減少していく
… 大宝 2 年（702）・和銅 6 年（713）・養老 4 年（720）に**軍事行動**が発生
… 天平宝字 5 年（761）には薩摩国・大隅国は**新羅征討計画**の動員対象とされる

＝ **鞠智城の展開を考える上で、これらの軍事問題との関係を分析する必要がある**

2：対隼人問題と鞠智城の関係

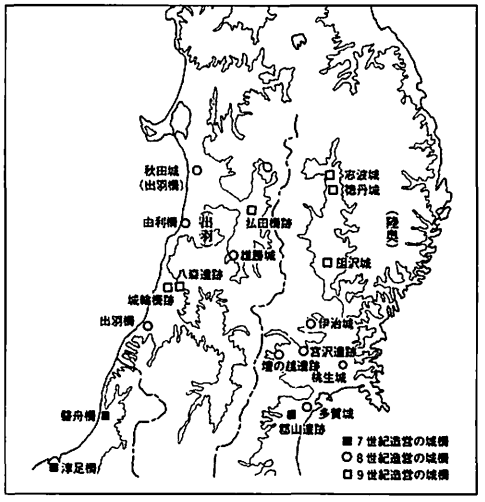
鞠智城の機能をめぐっては、**［見解 3］隼人支配の拠点**を重視する見解は多い。一方、鞠智城と九州南部は非常に離れているため、［見解 3］を否定する見解も提示されている【木村 2014】。ここでは、古代東北の城柵との比較を行ない、この点について検討を加える。

(1) 古代東北の軍事的空間

律令制国家は**蝦夷**を服属させるため、7 世紀代より積極的な北方進出を行なう

➡ **城柵**は蝦夷支配の拠点として機能し、支配領域の拡大に応じて配置される
… **陸奥国側**では北方進出が容易ではなく、**8 世紀後期**には計画的な配置が確認できる

➡ 岩手県の北上盆地に進出するようになると、**拠点と前線の距離**は長大になっていく
… **［拠点］**多賀城（陸奥国府）・**［前線］**胆沢城（鎮守府）は直線で**約 100km** 離れる



【城柵の配置】

(2) 玉造塞の支援機能

陸奥国では拠点と前線の距離が長大になり、宮城県北部に**支援機能**が構築される

➡ 延暦 8 年（789）、**山道蝦夷**を服属させるため、征夷軍が北上盆地の南部に進出
… 前線の衣川営に対して、**玉造塞**から大量の軍粮が輸送される

➡ 玉造塞の比定遺跡として、**宮沢遺跡**（宮城県大崎市）とする見解【柳澤 2007】
… 宮沢遺跡は駅路・河川により各方面と結節し、**交通の要衝**に位置することが特徴

➡ 9 世紀の前線は北上盆地となるが、玉造塞の支援機能は即座に解体されずに維持
… 胆沢城までは直線で**約 63km** あるが、玉造塞の交通上の利便性が重視された

(3) 対隼人問題と鞠智城の関係

対隼人問題は8世紀に発生したため、鞠智城を築城する際には意識されていない要素

➡ **鞠智城［第Ⅱ期］**は施設が充実し、文武2年（698）の**改修**と時期的に一致する

… 隼人による軍事行動は、大宝2年（702）に発生するため関係性は低い

➡ 隼人に対する**前線**は、当初は**肥後国南部（熊本県南部）**、後には**薩摩国（鹿児島県）**

… 鞠智城から熊本県南部は直線で**約100km**、後方支援の機能はない【木村2014】

➡ ただし、鞠智城は**米穀・（武具）の出給**を行なっていた可能性はある

…［拠点］大宰府 －［間接支援］鞠智城 －［直接支援］肥後南部 －［前線］薩摩国

＝ **鞠智城の立地環境をふまえると、対隼人問題とは直接的に関与することはなかった**

３：８世紀の対外防衛問題と鞠智城

日本と新羅の外交は8世紀には不安定になり、新羅を意識した防衛体制が整備されることになる。しかし、ほとんどの古代山城は廃止されており、その体制は白村江敗戦後の様相とは異なることが想定される。ここでは、8世紀の対外防衛体制と鞠智城の関係を検討する。

(1) 天平期の節度使体制

天平4年（732）8月～同6年（734）4月、対外防衛体制を整備するために**節度使**を設置

➡ 山陰道節度使・西海道節度使の所管国では、**防衛要綱「式」**が導入される

… 国単位で機能する賊を撃退するための**マニュアル**、以後の対外防衛の**基本方針**

➡ しかし、古代山城の復活・新造は行なわれず、軍事施設を伴わない体制に転換

… 藤原広嗣の乱にみえる**鎮**【大高2013】、**設置型の弩**を配備した簡易陣地

➡ 古代山城との関係が希薄化し、**沿岸警備**に重点を置いた体制として再編

… 沿岸部を突破された場合、**廃城となった古代山城**を活用した可能性はある

(2) 有明海防衛と鞠智城

8世紀における対外防衛は、**対馬嶋－壱岐嶋－大宰府のライン**を重視した体制

➡ 有明海は海上交通が活発であったが、**［見解1］有明海の防衛**を見出すことは困難

… 節度使体制により整備された防衛体制は、肥後国にも導入された可能性

➡ **鞠智城［第Ⅱ期］・［第Ⅲ期］**は、大宰府の建物変遷と連動する【熊本県教委2012】

…［第Ⅱ期］は防御機能の強化なし【木村2014】、［第Ⅲ期］には活動が低下する

＝ **天平期における防衛体制の転換により、鞠智城の軍事的機能は強化されなかった**

４：９世紀の新羅海賊問題と鞠智城

9世紀には**新羅海賊**が広範囲で活動し、8世紀とは異なり緊張感を伴う状況が発生する。新羅海賊の問題は肥後国にも波及し、鞠智城との関係を想定する見解がある。ここでは、新羅海賊問題の性格を分析し、9世紀における鞠智城の様相を明確にすることを試みる。

(1) 新羅海賊問題と有明海

9世紀には新羅人・新羅商人が広範囲で活動し、**新羅海賊**として認識される事例が増加

➡ **人的・物的な被害**が生じることもあり、現実に対応するべき問題としての性格

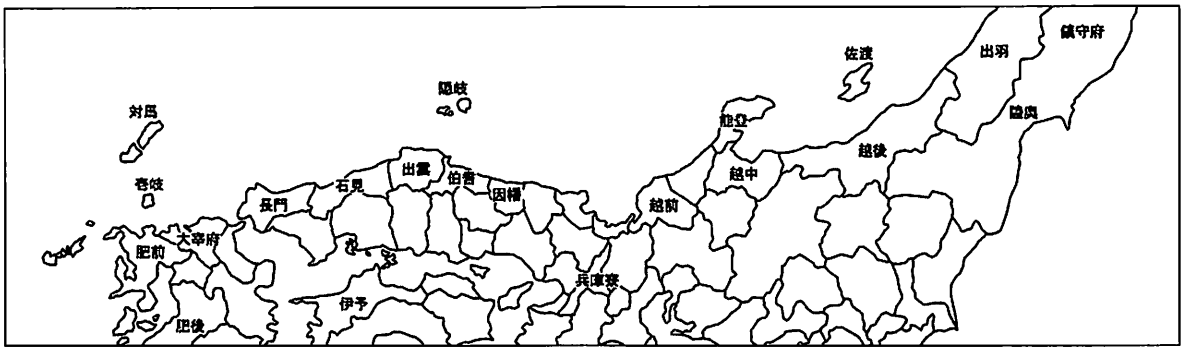
… ただし、新羅海賊は大規模ではなく、元寇のような深刻な脅威ではない

➡ 寛平5年（893）、**肥後国飽田郡**では新羅海賊により人宅が焼かれる

… 貞観8年（866）の通謀事件は、有明海方面の郡司らが関与していた

➡ 新羅海賊に備えるために**弩師**が置かれるが、肥後国は昌泰2年（899）と大幅に遅れる

… 対馬嶋・壱岐嶋（島嶼防衛）、山陰道・北陸道（防衛体制の不備？）



【弩師の設置】

(2) 9世紀における鞠智城の性格

新羅海賊問題は有明海にも波及し、［見解1］**有明海の防衛**は現実に発生した

➡ **鞠智城［第Ⅲ期］**には活動が低下するが、**［第Ⅳ期］**には機能するようになる

… 防衛拠点ではなく、稲穀などの**貯蔵・保管施設**に変化する【能登原 2014】

➡ 9世紀の防衛体制は、天平期の節度使体制により整備された**沿岸警備**が継承

… この頃の鞠智城は倉庫施設であり、新羅海賊に対して機能する拠点とはならない

➡ ただし、天安2年（858）には鞠智城に**不動倉**が存在したことが記されている

… 元慶の乱（出羽国）は大規模化したため、不動穀が緊急的に軍事利用された

＝ **新羅海賊の行動が大規模化すれば、軍粮を出給する軍事的機能を発揮した可能性**

おわりに

◇ 鞠智城が存続した理由は、8・9世紀における西海道の軍事環境とは連動しない

➡ **対外防衛問題**と**対隼人問題**は、鞠智城の軍事的機能を強化する方向に作用しなかった

…［対外防衛問題］古代山城を使用する防衛体制は**短期間で解体**（大宰府は除く）

…［対隼人問題］隼人支配に対しては**間接的に関与**（肥後国南部が直接的に関与）

➡ 鞠智城［第Ⅲ期］は活動が低下し、古代山城としての性格は**実質的には早期に喪失**

… 古代東北の**城柵**は、蝦夷に備える必要がなくなると機能を消滅させる

… 鞠智城は廃止されるべき環境にあったが、**［第Ⅳ期］**より**倉庫施設**に変化する

＝ **鞠智城は軍事的機能を脱落させながら、倉庫施設として転用された特殊な事例**

【参考文献】

・大高広和 2013「八世紀西海道における対外防衛政策のあり方と朝鮮式山城」『鞠智城と古代社会』1

・木村龍生 2014「鞠智城の役割に関する一考察－熊襲・隼人対策説への反論－」『鞠智城跡Ⅱ－論考編1－』

・熊本県教育委員会 2012『鞠智城跡Ⅱ－鞠智城跡第8～32次調査報告－』

・坂本経堯 1979「鞠智城址に擬せられる米原遺跡について」『肥後上代文化の研究』（坂本経堯先生著作集刊行会）

・佐藤信 2010「古代史からみた鞠智城」『古代山城鞠智城を考える』（山川出版社）

・能登原孝道 2014「菊池川中流域の古代集落と鞠智城」『鞠智城跡Ⅱ－論考編1－』

・柳澤和明 2007「『玉造柵』から『玉造塞』への名称変更とその比定遺跡」『宮城考古学』9

平成 26 年度鞠智城跡「特別研究」成果報告会　2015/03/14

八・九世紀における古代山城の展開と官衙・寺院

京都大学大学院文学研究科博士課程後期　清田美季

はじめに

八・九世紀の鞠智城の様相を、寺院との関係から考察する。

古代山城と寺院、城柵・官衙と寺院との関係と比較して検討する。

１．古代山城と寺院

(1)大野城と四王寺

八世紀後半、大野城では新羅が行っているとされる呪詛への対応のため、四王寺創建。

(2)秋田城と四天王寺

八世紀後半以降の三十八年戦争の時期、秋田城でも四天王寺創建。

厄災を祓い、護国の一助とするために四天王像が祀られる。

(3)日本海側諸国の四王寺

新羅海賊の襲来が問題化する九世紀後半以降、日本海側諸国で四王寺創建。

兵士の訓練、武器の修繕なども行われる。

(4)鞠智城内の寺院

九世紀後半、肥後国内でも様々な怪異が報告され、何らかの緊張状態あり。

寛平五年（893）には肥後国飽田郡も新羅海賊の襲撃を受ける。

鞠智城内には仏教施設が設けられた可能性は低い。四天王像安置も確認できず。

八・九世紀の対外的な危機は、鞠智城の機能に対して影響を与えた要因ではない。

２．鞠智城と十蓮寺跡

(1)郡家・城柵と周辺寺院

郡家・城柵などと共通の瓦を使用するなど、官衙と密接な関係をもつ周辺寺院が存在。

官衙・寺院の地理的関係は、標高差ほぼなし・郡家が高い場合が多い。

(2)十蓮寺跡と菊池郡

十蓮寺跡は菊池郡家周辺寺院か（八世紀中頃創建？～平安時代中期まで存続？）。

八世紀には菊池郡家整備、周辺に集落が多数形成される。

十蓮寺跡は菊池郡家から鞠智城までの経路上の見晴らしの良い場所に創建されたか。

おわりに

八・九世紀の鞠智城は対外的な危機に対応する施設としての要素は薄れる。

地域社会では一定の重要性を維持し続けた。

年	西暦	月	出来事
宝亀五	774	三月	大野城に四王寺創建。
			来日した新羅使、そのまま帰国。
延暦二十	801	正月	大野城の四王寺、廃止。
大同二	807	十二月	疫病流行のため、四王寺に仏像・什物を戻す。
大同四	809	九月	四王寺で四天王法再開。
弘仁二	811	二月	四王寺に釈迦如来像新造。
天長七	830	正月	出羽国の地震で秋田城の四天王寺仏像・堂舎が倒壊。
仁寿二	852	五月	京師・大和・越前・加賀・但馬・因幡・伯耆・隠岐・播磨・長門で甘露が降る。
仁寿三	853	五月	観世音寺・弥勒寺・四王寺・香椎廟・大宰府管内の国分寺で大般若経転読。
		九月	大宰府管内で天然痘患者に賑給。
天安二	858	閏二月	菊池城院の兵庫の鼓が鳴る。
		六月	肥後国菊池城院の兵庫の鼓が鳴る。同城の不動倉が焼ける。
貞観五	863	四月	博多津に新羅僧三人来着。
		十一月	丹後国に細羅国人来着、因幡国に新羅人商人？来着。
			石見国に新羅人の船が漂着。（翌年に「去年」のこととして記録）
貞観六	864	十二月	肥後国阿蘇郡健磐龍命神霊池で震動など。
貞観八	866	二月	阿蘇大神の怒気で疫病・隣境の兵を憂う。大宰府四王寺で経典転読。
		三月	筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・肥後の諸神社で読経。
		四月	卜筮により山城・若狭で兵事に警戒させる。
			陰陽寮が隣国の兵の襲来警戒を告げる。
			若狭国で印公文庫・兵庫が鳴る。
		七月	肥前国基肄郡の人が新羅に武器製造技術を供与。
		九月	美作国で兵庫が鳴る。
		十一月	能登・因幡・伯耆・出雲・石見・隠岐・長門・大宰府で新羅賊兵対策で班幣。
			健児を出す統領選士の訓練実施。
貞観九	867	五月	伯耆・出雲・石見・隠岐・長門に四天王の仏画を配布。
		十二月	宇佐八幡宮・北陸道諸国に一万三千仏の仏画を配布。
貞観十一	869	三月	隠岐国、史生を一員廃して弩師を置く。
		六月	新羅海賊が博多湾に侵入、豊前国からの調の絹・綿を強奪。
貞観十二	870	二月	因幡・伯耆・出雲・石見・隠岐で武器を修繕。
		五月	出雲国、史生を一員廃して弩師を置く。
		六月	対馬に選士五十人を配置。
			肥前国杵嶋軍の兵庫が震動。隣兵に警戒する。
			新羅人七人が逃亡、筑前・肥前・壱岐・対馬で警戒。
		八月	対馬に新羅対策で弩師を配置。
		九月	新羅人二十人を武蔵・上総・陸奥国に配置。
貞観十三	871	正月	壱岐で兵庫の鼓が鳴る。
		五月	佐渡で兵庫が震動する。
貞観十五	873	三月	因幡・伯耆・出雲・石見・隠岐・大宰府で兵革を警戒。
			薩摩国甑島郡に不審船来着。新羅人？渤海人？
		十一月	長門国四王院の沙弥二人を度す。
貞観十六	874	八月	新羅人が対馬に漂着。
貞観十七	875	六月	肥後国玉名郡倉上に大鳥二羽、菊池郡倉上で鳥が群れて葦草を引き抜く。
貞観十八	876	七月	肥後国で白亀捕獲。
元慶二	878	四月	元慶の乱
		六月	因幡・伯耆・出雲・隠岐・長門で兵士訓練・武器修繕、四天王像前で調伏法。
		十二月	肥後国に大鳥集結、川の水が赤く変色。
元慶三	879	三月	肥後国菊池郡城院の兵庫の戸が鳴る。
元慶四	880	二月	隠岐国で兵庫が震動、三日後に庫中の鼓が鳴る。
			因幡・伯耆・出雲・隠岐で警戒。
		六月	但馬国の百姓が船らしきものを黙止家訓。
			但馬・因幡・伯耆・出雲・隠岐で警戒。
元慶五	881	八月	加賀国に甲冑供給、武器新造。
仁和二	886	五月	山城国石清水八幡宮で鳴動。兵事に警戒する。
寛平五	893	閏五月	肥後国飽田郡を新羅海賊が襲撃。
昌泰二	899	四月	肥後国、史生を一員廃して弩師を置く。

古代朝鮮半島と肥後地域の交流史からみた鞠智城―築城背景と役割を探る―

京都産業大学・近畿大学 非常勤講師 近藤浩一

はじめに ⇒朝鮮半島西南地域の実情と肥後地域の間で展開した交流史（５世紀後半～９世紀末）の分析から鞠智城の築城背景・役割を明らかにする。→特に築城期（白村江敗戦直後）の朝鮮半島から鞠智城・倭国の古代山城をみると（６～７世紀の築城以前と新羅海賊が来航する９世紀後半にも留意）？

○倭国の古代山城築城記録＝『日本書紀』天智４年(665) ８月条・天智６年(667)11 月是月条。鞠智城は『続日本紀』文武２年(698) ５月甲申条の修繕記事のみ存在（築城記録なし・史料的制約多い）。

○山城をめぐる既存の研究（考古学が中心であったが近年では文献史学や歴史地理からの成果も多い）＝唐・新羅に対する軍事防衛（大宰府との関係）。最近では倭国史全体（地域支配）のなかでアプローチ。特に鞠智城は対隼人政策・官衙的性格を含む倭王権の地域支配との関係が強く指摘される。→意外にも築城期の緊迫した東アジア情勢のなかで検討したものは少ない（８世紀以降を扱った研究は多い）。

○白村江敗戦後、664・665・667 年に唐使節（朝鮮半島の熊津都督府）が来倭。新羅の使節が来倭する 668 年以前に築城→旧百済（西南地域）の都督府政権の実体にスポットを当てた研究が必要。

１．史資料からみた鞠智城と朝鮮半島西南部情勢 ⇒朝鮮半島西南地域の情勢は鞠智城の築城並びに役割・機能に大きく関係したのでは？

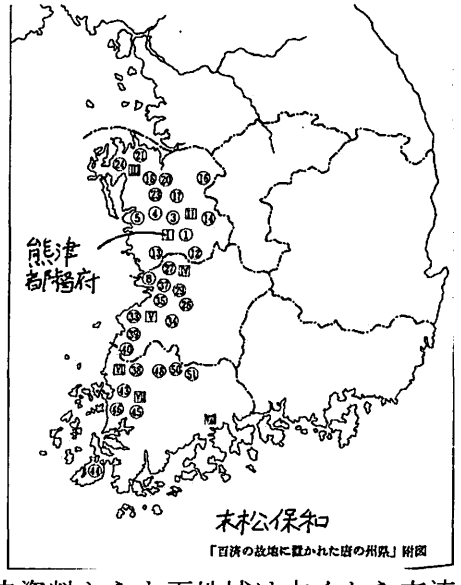
（１）史資料にみられる鞠智城 ⇒文献・考古学の成果から、７世紀後半～８世紀初期（築造期・修繕期）と９世紀中葉～後半（再利用期）に最も機能。→両者の半島情勢は極めて似通っている。半島西南地域では、前者は唐の政権（熊津都督府）、後者は豪族政権（特に後百済）が形成。

（２）再利用期（９世紀中葉～後半）の肥後地域と新羅海賊、半島西南地域 ⇒鞠智城の再建に関連？

⑦大宰府言、去月廿二日夜、新羅海賊乗艦二艘来博多津、掠奪豊前国年貢絹綿、即時逃竄。発兵追遂□不獲賊。（『日本三代実録』貞観 11 年(869) ６月 15 日条）

⑧大宰飛駅使来称。新羅賊於肥後国飽田郡燒亡人宅。又於肥前国松浦郡逃去。（『日本紀略』寛平５年(893)閏５月３日条） ⇒９世紀中葉～後半、肥後地域・北部九州に新羅海賊が頻繁に出現→新羅海賊の実体は＝九世紀後半の半島各地では大規模な盗賊蜂起・豪族（城主・将軍）が台頭。特に後百済は完山州（全羅北道全州）を根拠に後百済の国号を自称（西南地域に新王権を樹立）。それらに迎合するような海上活動者が抗争の中で日本の海域において略奪行為（交易）。→交通は活発化する。

（３）築城期（７世紀後半）の旧百済地域―唐の熊津都督府設置 ⇒鞠智城の築城に関連？



「百済の故地に置かれた唐の州県」附図

660 年百済滅亡（義慈王らは唐に連行）・旧百済は唐の管理下→当初は熊津都督府など五都督府を設置（定林寺の五重石塔戦勝記念碑「凡置五都督・・」）。その後、⑱のように再編成。１都督府・７州・51 県体制→末松氏の考証で 665 年８月の百済と新羅の会盟（⑰・㉙）の際に約束された熊津都督府の領域であることが解明。→百済滅亡当初より一層西南部に集中。

⑱都督府一十三県、嵎夷県、・・。東明州四県・・。支潯州九県。魯山州六県。古四州本古沙夫里五県。沙泮州本号尸伊城四県。帯方州本竹軍城六県。分嵯州本波知城四県。（『三国史記』地理４都督府７州条）

２．築城以前（６・７世紀）の肥後地域と半島西南地域 ⇒史資料からも両地域は古くから交流→鞠智城の築城背景には両地域の交流・外交の前史が関連した

と思われる（前史を踏まえる必要性）。
○江田船山古墳出土の百済系文物、全羅南道栄山江流域の前方後円墳（5世紀末～6世紀初に突如出現）の造営に肥後地域の倭人(工人)が関与→肥後を含む北部九州の豪族による有明海の交流ルート（豪族は近畿の氏族とも接触）の延長線上に倭王権の対外交渉が成立。
○筑紫君磐井の活動→筑紫・火・豊（有明海地域）を勢力基盤に高句麗・百済・新羅・加耶などからの貢職船（外交使節）を招致。倭王権の百済支援を担いながら複雑な半島西南地域にて倭国の対外活動を代弁。しかし外交の一元化をめざす倭王権によって殺害→その後の外交は倭王権に従属しながら行う形態に変質するが、肥後地域の担う立場は変わらず（鞠智城の築城時期まで？）。例えば556年に百済王子恵の護送に従事した筑紫火君の活躍（磐井の軍事力・ネットワークを継承）。
○葦北国造阿利斯登の子日羅(～583)の活躍→倭王権の命で半島に派遣されながら百済第2の官位を有す（百済にも屋敷をもち、韓語を話す人たちと暮らし百済王権のためにも尽力)。倭国王に召喚され国政に参加（倭・済間に散在する外交はじめ諸問題を提言）→当時の倭王権・肥後地域と百済・半島との交流形態（外交）を象徴？＝両王権の紐帯の役割（倭・済王権も二重の従属性を積極的に模索）、その中核に日羅の出身地・肥後地域があった（両王権の政治・外交・文化交流が肥後地域との関係によって成立）。⇒肥後の豪族は磐井以来日羅一族にいたるまで半島西南地域（特に百済）と独自のネットワークを築き対外交渉を担っていた（両王権の外交交渉を成立に導いた主体者）。
○その後も肥後国（葦北）と半島西南地域（百済）では恒常的な交流・対外交渉が続いた⇒以降も百済王権にとって肥後地域との関係は重要視。こうした交流史も鞠智城の築城背景にあるのでは？

3．築城期（白村江直後）における熊津都督府の対倭外交とその性格

（1）熊津都督府による百済遺民の登用と対倭政策―禰軍を中心に―　⇒熊津都督府の占領期にも2.で述べた肥後地域と半島西南（旧百済）地域間の歴史的な交流・外交は持続したのでは？
○熊津都督府は、白村江勝利後の翌年の664年からたて続けて倭国に使者を派遣→佐平禰軍を筆頭に旧百済人（百済官人）を白村江の戦後処理を担う対倭外交に積極的に活用＝対倭政策の一端。

㉑夏五月戊申朔甲子、百済鎮将劉仁願、遣朝散大夫郭務悰等、進表函与献物。・・・十二月甲戌朔乙酉、郭務悰等罷帰。(『日本書紀』天智3年(664)条)

㉒大使朝散大夫上柱国郭務悰等卅人、百済佐平禰軍等百余人、到対馬島、遣大山中采女通信侶、僧智弁等来、喚客於別館、・・、一二月、博徳授客等牒書一函、函上著鎮西将軍、日本鎮西筑紫大将軍牒在百済国大唐行軍総管、使人朝散大夫郭務悰等至、披覧来牒、尋省意趣、既非天子使、又無天子書、唯是総管使、乃為執事牒、牒是私意、唯須口奏、人非公使、不令入京、云々。(『善隣国宝記』「海外国記」)
→この時倭国は使節を私使とみなし帰還させている。熊津都督府側はそれを責めず㉓のように翌年に唐国本国の劉徳高を首席として派遣。⇒注目は両年とも倭国に多数の百済人を派遣している点。

㉓唐国遣朝散大夫沂州司馬上柱国劉徳高等。等謂右戎衛郎将上柱国百済禰軍・朝散大夫上柱国郭務悰、凡二百五十四人、七月廿八日、至于対馬、九月廿日、至于筑紫、廿二日進表函焉。・・十二月戊戌朔辛亥、賜物於劉徳高等。是月、劉徳高等罷帰。是歳、遣小錦守君大石等於大唐、云々。(『日本書紀』天智4年(665)条)

㉔十一月丁巳朔乙丑、百済鎮将劉仁願、遣熊津都督府熊山県令上柱国司馬法聡等、送大山下境部連石積等於筑紫都督府。(『日本書紀』天智6年(667)11月条) →司馬法聡も下の㉗から百済人と判断。
●禰軍の活動→対倭外交以外に、670年前後新羅との関係が悪化するが対新羅政策においても活躍。

㉕王疑百済残衆反覆、遣大阿飡儒敦於熊津都督府請和、不従。乃遣司馬禰軍窺覘。　王知謀我、止禰軍不送、挙兵討百済。(『三国史記』文武王10年(670)秋7月条)

㉗由是獲罪大朝。遂遣級飡原川・奈麻辺山及、所留兵船郎将鉗耳大侯・莱州司馬王芸・・熊州都督府司馬禰軍・曽山司馬法聡、軍士一百七十人、上表乞罪曰。(『三国史記』文武王12年(672)9月条)

→670年新羅に派遣されスパイ行為（窺覘）に従事、それを察知した新羅が拘束。672年に禰軍や法聡を含む唐人と百済人を唐（都督府）に帰還。⇒百済遺民は都督府の政治・外交活動に関与

・「祢軍墓誌」→拓本写真と釈文が公開（王連龍2011）。下は祢軍の外交活動に関わる内容のみ。

㉘[２]于時日本餘噍、據扶桑以逋誅。風谷遺甿、負盤桃而阻固。萬騎亘野、与盖馬以驚塵。千艘横波、援原虵而縦泳（１）。以公格謨海左、龜鏡瀛東、特在簡帝、往尸招慰（２）。公侑臣節而投命、歌皇華以載馳（３）。飛汎海之蒼鷹、翥淩山之赤雀。决河眥而天吳静、鑿風隧而雲路通。驚鳧失侶、濟不終夕。遂能説暢天威、喩以禍福千秋（４）。僭帝一旦稱臣。仍領大首望數十人、將入朝謁。特蒙恩詔授左戎衛郎将（５）。

→下線（１）の「日本」（＝百済）・「扶桑」（倭）・「風谷」（高句麗）・「盤桃」（新羅）は唐からみた東方を意味する語句(李成市2013)。→「時に百済の残党は倭に依拠して誅罰を逃れていた。高句麗の残党は新羅を拠点にして堅固であった。」（２）以下は（１）の状況を打開するために祢軍がとった行動・（３）は使者としての当初の業績（664・665年の倭国派遣）→日本は国号でなくとも、都督府側が倭国を相当意識して外交にのぞんだ様子が窺い知られる。対倭交渉のために彼をわざわざ旧百済に戻した可能性もある（⑯のように倭人・倭国は百済遺民の連携の対象にもなると認識）。⇒戦後の熊津都督府の対倭外交は、百済滅亡以前の百済人と倭人の緊密なネットワークをうまく活用（旧百済の対倭交渉・交流ルートを確保しようと働きかけていた？）。百済地域の安定した支配にも対倭政策が必須。

（２）熊津都督府における倭人の活動と肥後地域 ⇒磐井や日羅が百済（新羅）王権の立場から行動したように、都督府側で何らかの活動に従事する倭人（肥後地域の豪族）も存在したのでは？

㉙開府儀同三司新羅王金法敏・熊津都尉扶余隆、盟干百済之熊津城。・・、仁軌領新羅・百済・耽羅・倭人四国使、浮海西還、以赴太山之下。（『冊府元亀』外臣部26盟誓・高宗麟徳２(665)年８月条）

→665年８月の熊津都督扶余隆(前百済太子)と新羅文武王による会盟後に、劉仁軌が新羅・百済・耽羅・倭人の四カ国の使を率いて泰山の封禅の儀に赴いている。熊津都督府のもと倭人を同行させたことはその対倭政策を伝える重要な事例。→倭人の実体は？（㉓の倭国の使節とみなす見解もあるが㉓の時期では儀礼に間に合わないので在留倭人とみられる。ともあれ、既存の研究では倭国の側からのみ解釈）

→都督府側で何らかの活動に従事する倭人では？さらに664年からの対倭交渉も倭人と百済遺民の関係を軸に既存のネットワークによって行われた部分も多かったのでは。671年であるが具体例は次の㉚。

㉚十一月甲午朔癸卯、対馬国司、遣使於筑紫大宰府言、月生二日、沙門道久・筑紫君薩野馬・韓嶋勝娑婆・布師首磐四人、従唐来曰（１）、唐国使人郭務悰等六百人、送使沙宅孫登等一千四百人、総合二千人、乗船册七隻（２）、俱泊於比知島、相謂之曰、今吾輩人船数衆、忽然到彼、恐彼防人、驚駭射戦、乃遣道文等、予稍披陳来朝之（３）。（『日本書紀』天智10年(671)11月甲午朔癸卯条）

→都督府は（１）の４人を（２）の唐人郭務悰一行の先発隊として対馬に送り、（３）のような事情を説明させている。その一人の筑紫君薩野馬は肥後と関係の深い筑紫君（筑紫火君や磐井）の一員・韓嶋も豊前出身→沙宅孫登ら旧百済官人のみならず倭人を登用し水先案内、実務的な交渉を任せていた＝百済遺民と倭人たちを傘下に組み込み旧来のネットワークをかなりの割合継承・活用＝両国間の外交の実体。

⇒歴史的な肥後地域と半島西南地域の交流は健在→この時期に築城される鞠智城とも深く関係？

（３）郭務悰ら２０００人来倭と熊津都督府の対倭認識 ⇒㉚の2000人の大船団の実体は？

○百済遺民沙宅孫登に連なる1400人→百済人難民輸送説、捕虜及び遣唐使関係者（倭国の関心を引き出せた倭人）説＝新羅との戦闘のために倭の軍事的支援を引き出そうという解釈→多くの点で疑問。倭国の立場から過大評価したものでは。派遣した都督府の側（白村江の戦勝国）からの検討が必要。

●671年前後の半島情勢→新羅は670年３月から都督府に対する攻勢を強め、671年７月頃には泗沘（扶余）を占領し所夫里州を設置（熊津都督府からみれば没落した）。この後10月には両者は海上で激しい

戦闘を繰り広げ、都督府側は漕船70隻以上で対抗するも新羅水軍に大敗する。翌年から唐側も反撃。

㉜冬十月六日、撃唐漕船七十余艘、捉郎将鉗耳大俟、士卒百余人、其淪没死者、不可勝数、級飡当千功第一授位沙飡。（『三国史記』文武王11年(671)冬10月条）

⇒ともあれ、郭務悰ら2000人はこうした半島情勢の中で倭国に派遣。(3)－2000人の装いが対馬の防人の攻撃の対象になり得たことに注目＝使人の風貌とは異なり武装した船団＝㉜に描かれる新羅水軍と激突して敗れた唐水軍と同等な様相を彷彿？㉚(47隻)と㉜(70隻)は船団の数も比較的近い→古く森克己氏などが提起したような軍人（兵士、都督府水軍・唐からの援軍）説は十分成り立つのでは。

○しかし、倭国を威嚇するための軍人集団であったとは到底考えられない。→㉞郭務悰らは来倭後書函と信物（阿弥陀仏像。築城期鞠智城出土の百済系小金銅仏との関係は？）を進めて修好を結ぶことに努めている（威嚇行為は一つもない）。㉚(3)倭国の防人など防衛体制を熟知。→ある程度周到な準備のもとで成し遂げられていたのでは（対倭外交の中で何らかの取り決めがなされていた？）。倭国側も㉟武器を供給し無難に対応。㉚(2)の解釈「郭務悰ら唐人600人・沙宅孫登ら百済人1400人の兵士を送る」

⇒この時都督府側は倭国を後背基地として期待（ある程度そのように認識）していたのでは＝唐側は倭国を拠点に体制を整え再起をはかろうとした？翌年から攻撃に転じて新羅から謝罪(㉗)をとりつける。

☆白村江直後の唐（熊津都督府）の対倭政策・交渉＝戦勝国としての半島支配に付随した問題。旧百済の半島西南地域と倭国の歴史的なルートを確保、当初から有事の際などに倭国を利用しようと模索？

➔肥後地域に築城された鞠智城も都督府が対倭外交を展開する上で多くの役割を果たしたと推察。

むすびにかえて—半島勢力の対倭(日)交通と鞠智城、古代山城— ⇒肥後地域と半島西南地域の交流史・白村江直後の熊津都督府の対倭外交をバックグラウンドにもつ鞠智城の築城背景・役割・機能は？

○肥後地域・北部九州の豪族→半島西南地域からのモノ・ヒト・情報を最も早く体感。熊津都督府の設置、白村江敗戦後の動向にも敏感に対応（危機感もピーク）したのでは。→鞠智城の築城にも、倭王権の一方的な意思のみならず彼らの働きかけが想定。両地域の交流史を見れば、境界に位置する彼らは倭王権以外に熊津都督府に対しても対外的危機の解消と交通の安定を求めた可能性も？

○鞠智城は唐・半島勢力に対する防衛施設の役割はそれほど担っていなかったと推察→戦後の唐・倭交渉で山城の築城が倭国の問題行動としてあがっていないのは、都督府も倭国の山城を反唐の軍事拠点としては認識していなかったのでは（山城が唐の対倭外交に対し威嚇する場面もみられない）。

○熊津都督府と倭王権の間で展開した対外交通の一端を担い、むしろ双方の勢力・地域間の交流・外交を促進させたと想定⇒白村江直後の緊迫した情勢下で交通の拠点に築かれたランドマーク的存在？倭国と半島勢力の間の旧来からのネットワークを把握。⇒倭国内の山城造営（特に鞠智城）には築城期に対倭交渉を推進した熊津都督府とも何らかの合意がなされていて、山城の機能には軍事的な側面（軍事防衛が最優先であった山城もあろう）以上に対外交渉の場としての面があったと考えられる。

○九世紀後半の再利用期を考慮すると当初から交易拠点（東北の城柵参照）として機能した可能性も。

☆Ⅱ期（七世紀末）の鞠智城に八角形建物が建立された意義も半島（次は新羅）との交流史の中で解明？

→六七六年新羅（都は慶州）が唐を追い出し半島統一＝肥後地域と交流する半島勢力の主体も熊津都督府から新羅（668年以降倭国に使節を派遣。統一期は倭国に擦り寄り九州地域にも影響）に移行。

※半島の八角形建物は、年代の古い高句麗の事例を除いてはその大半が新羅領域の遺跡（慶州羅井・京畿河南市二聖山城・京畿安城市望夷山城・全南務安郡良将里遺跡など）から発見。性格をめぐっては、注(26)参照（有力は祭祀建物説）⇒新羅との交流史の中で再考。鞠智城の役割・存続理由とも関係？

平成26年度　鞠智城跡「特別研究」成果報告会

鞠智城地域と大宰府

東京大学大学院人文社会系研究科博士後期課程　西本哲也

はじめに

史料1　『続日本紀』文武二年（698）五月甲申（25日）条

甲申。令大宰府繕治大野・基肄・鞠智三城。

→鞠智城の初見記事（大野城・基肄城とは異なり、創建記事は見られない）

史料2a　『日本文徳天皇実録』天安二年（858）閏二月丙辰（24日）・丁巳（25日）条

丙辰。肥後国言、菊池城院兵庫鼓自鳴。丁巳。又鳴。

史料2b　『同』同年六月己酉（20日）条

大宰府言、去五月一日、大風暴雨、官舎悉破、青苗朽失、九国二嶋尽被損傷。又肥後国菊池城院兵庫鼓自鳴。同城不動倉十一宇火。

史料2c　『日本三代実録』元慶三年（879）三月十六日条

十六日丙午。（中略）又肥後国菊池郡城院兵庫戸自鳴。

→9世紀（Ⅳ～Ⅴ期：創建当初とは異なる）では事象の報告に留まる

→史料1から史料2に見える大宰府の関与の変化の原因は？

→日本古代の地方行政における大宰府を踏まえた検討の必要

一、「繕治」記事と大宰府

1、令文上の大宰府の職掌

史料3　養老職員令69大宰府条（大宝令も同文か）

大宰府帯筑前国。／主神一人掌、諸祭祠事。帥一人掌、祠社・戸口簿帳・宇養百姓・勧課農桑・糺察所郡・貢挙・孝義・田宅・良賤・訴訟・租調。・倉廩・徭役・兵士・器仗・鼓吹・郵駅・伝馬・烽候・城牧・過所・公私馬牛・闌遺雑物、及寺・僧尼名籍・蕃客・帰化・饗讌事。大弐一人掌同帥。少弐二人掌同大弐。大監二人掌、糺判府内。審署文案、勾稽失。察非違。少監二人掌同大監。大典二人掌、受事上抄。勘署文案、検出稽失、読申公文。少典二人掌同大典。大判事一人、掌、案覆犯状、断定刑名。判諸争訟。少判事一人掌同大判事。大令史一人掌、抄写判文少令史一人掌同大令史。大工一人掌、城隍・舟楫・戎器・諸営作事。少工二人。掌同大工。博士一人掌。教授経業、課試学生。陰陽師一人掌、占筮相地。医師二人掌、診候・療病。算師一人掌、勘計物数。防人正一人掌、防人名帳・戎具・教閲、及食料田事。佑一人掌、同正。令史一人。主船一人掌、修理舟楫。主厨一人掌、醯・醢・鹽・葅・醬・鼓・鮭等事。史生廿人。

→大宰府の職掌は長官の帥のものとして規定　＋　国司の職掌も同様

→このような職掌は飛鳥浄御原令制下まで遡るか？（浄御原令は復原不可能）

→ ｛大野城・基肄城創建記事では大宰府については記述されない
　　持統三年（689）の「新城」についても国家の関与は窺える

史料3の令文はどのように作られたものか？　→　唐令も踏まえる必要

→官司の被官関係からは都督府との共通項が考えられるが、職掌の在り方については州（とそれを引き継いだ日本の国）に近い　（職員令以外の篇目に見えるものについても同様）

→職員令大宰府条は（唐令を念頭に置きつつも）日本独自の事情によって立文されたもの

2、山城の記事と大宰府

山城関連記事→山城の所在地を示すのには国名は用いられるが、組織としての「国」は見えず

→関与するのは中央と大宰府

壬申の乱の段階で、「筑紫大宰」栗隈王が軍事動員権、筑紫に「城」「隍」があり国防上重要

→筑紫大宰は（在地の有力者でなくとも）人的動員権を有していた

3、「筑紫大宰」とその職務

史料4　『日本書紀』天智十年（671）十一月癸卯（10日）条

十一月甲午朔癸卯。対馬国司、遣使於筑紫大宰府言、（後略）

→対馬の国司が「筑紫大宰府」に報告

・その他の筑紫大宰の行動→祥瑞の献上、仏教の布教　（天武朝以後）

・持統五年（691）段階で29年間務めた筑紫史益　→天智朝初年から組織が存在していた

→「筑紫大宰」は大宰府と同等の権限を持ち、複数国を管轄する存在であった

（その他に「吉備大宰」が見えるが、死亡記事のみで職務については未詳）

総領…大宰と同じ存在と考えられる

→評司に対する処罰権を有する、後年の大宰府は郡司の先議権を持つ　→地方社会への影響

→行政上の権限は天武朝に加わったものか

→天武朝に、国司の権限が一度奪われ再度与えられたことを考えると、大宰・総領も同様なものであったと考えられるのではないか。

大宰・総領は、中央から派遣された人物によって担われ、その組織による支配が行われた。その構成員は中央からの派遣に限らず在地の人物も採用された。その権限は、天武朝以降国司と同様の地方行政のものとなった。そして、対外関係上の重要さから筑紫大宰だけが大宰府として残り、国司と同様の職掌を持つ職員令（大宝令は官員令）の立文がなされたものであるか。

二、令制以後の大宰府と鞠智城

1、八世紀の大宰府の職掌

藤原広嗣の乱→大宰府の軍事動員権を示す

→大宰府が廃止され、行政は筑前国、軍事は鎮西府へと分割（741～743年）

→再設置（軍事的な役割も復活）

史料5　『続日本紀』天平勝宝八歳（756）六月甲辰（22日）条

甲辰。始築怡土城。令大宰大弐吉備朝臣真備専当其事焉。

→大宰府が新しい城の建設に関与　（大宰府の性質は維持されている）

八世紀の肥後国　→　道君首名が筑後守と肥後守を兼任し善政を敷いた　→　重要性

2、九世紀における山城の記事と大宰府

『類聚三代格』貞観十二年（870）五月二日太政官符

→参議兼大宰大弐の藤原冬緒の起請により、大宰府に大宰府の府庫や大野城の器仗を確認の上で別扱いにすることを命じている

→大野城は依然として大宰府の管理下にあると考えるのが自然

『類聚三代格』弘仁四年（813）八月九日太政官符

→筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・肥後の軍団兵士を大幅削減

→自分勝手に兵士が使われ、使い物にならないことが理由とされるが、「強壮者」だけいれば、人数がいなくとも事足りる「中外無事」の状態となっている

この時期の鞠智城はⅣ期　→　遺跡の在り方が大きく変化（大型礎石建物・主軸が真北など）

→倉庫機能の強化（焼け米、不動倉焼失→食糧備蓄）

「中外無事」の中、大宰府直轄である必要がなくなったものか　（cf. 大野城）

史料２ｃ　→　「菊池郡城院」　→郡の管理下にあったものか？

九世紀になっても大宰府が防衛上重要な山城に関与するという態勢は維持されたものと考えられる。しかし、その中でも鞠智城地域は相対的には軍事的緊張が低く、大野城とは異なり、大宰府の直接の管理から外れ、肥後国（もしくは菊池郡）の管轄になったと考えるのが妥当であろう。もちろん、「兵庫」がある以上軍事的側面を持っていたことは言うまでもないことであるが、この段階では民政上の役割を重視できる「中外無事」の状況になったと考えることができるのではないか。

おわりに

大宰府　…　大宰・総領の権限（≒国司の権限）を引き継ぐ

↓

九世紀に至るまで、山城への関与は変わらない

→鞠智城への関与が見られなくなるのは、鞠智城（地域）の変化

↓

大宰府から国（郡）へと移管される

石積技術から見た古代山城築造集団の研究

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
南健太郎

1．古代山城と石積遺構

（1）古代山城とは

①朝鮮式山城：史書に記載のある山城

665 年（築城）　大野城、基肄城、長門城
667 年（築城）　金田城、屋島城、高安城
672 年（壬申の乱）　三尾城
698 年（繕治）　**鞠智城**
699 年（繕治）　三野城、穂積城、
719 年（廃城）　茨城、常城

②神籠石式山城：史書に記載のない山城

北部九州型　雷山神籠石、阿志岐神籠石、鹿毛馬神籠石、杷木神籠石、高良山神籠石
女山神籠石、おつぼ山神籠石、帯隈山神籠石、御所ヶ谷神籠石、
唐原神籠石

瀬戸内型　石城山神籠石、鬼城山城、大廻小廻山城、播磨城山城、永納山城、
讃岐城山城

（2）石積遺構

・古代山城の主要な構成要素。石垣、水門（列石、敷石）などがある。
・現在も露出しており、発掘調査が行われていなくても比較が可能。
・石の積み方は時期的・地域的なまとまりを持つ可能性がある。
→石積遺構の比較から古代山城間の技術的な関係性を検討し、築造集団の動向と山城築造の背景を考える。

2．鞠智城の石積遺構

（1）三枝の石垣

・石材の表面形態が、正方形・長方形・台形・三角形などさまざま。
・積み方は横目地が通る個所が限定的で、縦のラインもほとんど揃っておらず、工程上の単位を見出しがたい。
・使用石材には矢が打ち込まれた痕跡。

（2）馬こかしの石垣

・石材はほとんどが加工された凝灰岩（一部に安山岩質）。
・長辺を横向きにした長方形が多く、横目地が通る。水平を意識した積み方。

（3）池ノ尾門

・石積は石塁や通水溝とそれに連なる導水溝にみられる。

・石材には顕著な加工痕は認められなかったとされており、切石以外を用いている。各段において横目地が通っている。

・石塁にほぼ直交するように全長約十六．〇mの通水溝が確認され、城内側にはこれに連接する長さ約四．三mの導水溝が作られている。

⇒池ノ尾門の石積方法は他の山城と比較可能。他の山城の築造技術を比較することから、鞠智城の築造技術の系譜や築城時期について検討する。

3．古代山城間の技術比較

（1）城門石塁・下部構造の検討

城門下部に通水溝をもつ古代山城：鞠智城（朝鮮式山城）、屋島城（朝鮮式山城）、
鬼城山城（瀬戸内型神籠石式山城）

①鞠智城

（通水溝）

底部：径 30～40 cmの扁平な石材が敷かれる

側壁：板石を立てるところと細長い石材の小口面を内側に向けて数段積みあげるという２通りの構築方法。

蓋石：横長の大型石材が使用されている。

※城内側に導水溝あり。敷石の明確な痕跡は確認されていないが、導水溝内には 10～30 cm大の石が散在。側壁は１～３段程度の石積で構成。開渠型。

※須恵器、土師器、瓦などが出土。７世紀第４四半期～１０世紀代までの長期にわたる。少なくとも７世紀第４四半期には門が使用されていたことを示している。

②屋島城

（上段）

側壁：南側が岩盤、北側が埋土。

蓋石：あり。

（中段）

側壁：板石を両側に立てる。

蓋石：なし（下段との境にはあり。）。

（下段）

側壁：下段は北側に岩盤を利用。

蓋石：なし。

③鬼城山城

北門の床面に通水溝。

底部：上面が平らな石材が敷かれており、側壁の下に敷石が入り込んでいることから、敷石の上

に側壁を立てたものと思われる。

側壁：石材は細長い形のもので、幅20㎝前後の面を上面にして、小口側を接するように並べられている。側壁は両側の石材が対になるように大きさが揃えられており、計画的な並べ方。

蓋石：城内側から中ほどの大型石材が敷かれるところまでは開渠、そこから城外までは暗渠となる。

○比較

・床面の構造は石敷きが鞠智城と鬼城山城でみられ、屋嶋城では岩盤が利用されている。前者でも鞠智城は扁平な石数個で通水溝内床面が作られているが、鬼城山城では一枚で床面を構成している。

・側壁もそれぞれに特徴があるが、鞠智城と屋嶋城では石積で構成されるのに対し、鬼城山城では大きさが揃えられた石材が並べられている。屋嶋城では岩盤が側壁として利用されているところもある。

・鬼城山城では城門の床面構造と暗渠・開渠の別が密接に関わっており、屋嶋城も懸門構造の城門床面に関連して通水溝も段構造になっている。鞠智城は通水溝床面の傾斜については明瞭ではない。

⇒側壁の構造では鞠智城と屋嶋城の共通性がうかがわれ、床面については石敷きがみられる点から鬼城山城と鞠智城のつながりを見出すことができる。城門構造は屋島城と鬼城山城に共通点多数。三城の築造に有機的な関連性。

⇔細かい点で各城の独自性もみられることは、それぞれの地域的な技術基盤の違いが反映されているように思われる。

（２）水門構造の検討

①鬼城山城

A類（第２～５水門）：高所に排水口が設けられる。

（第２・３水門）

・排水口の上部は土塁によって覆われるが、排水口が石塁の天端から独立して構築され、天井石の上に直接土塁が築かれる。

・横長の巨石を用いて横目地が通るように積まれる。

（第５水門）

・排水口の上部は土塁によって覆われるが、排水口が石塁内部にあり、天井石の上にさらに石材が積まれて、その上に土塁が築かれる。

・横長の石材がほとんど使用されておらず、横目地が通るのは通水溝底板の下面のみ

B類（第１水門）：排水口の位置は石塁下端。前面敷石の一部を帯状に剥ぎ取り、その上に石塁下端の石材を被せる。側面に沿う方向に排水。

C類：第０水門

②大廻小廻山城

・横長長方形の石材はみられない。

・中央部は通水口の基底石と天井石が積まれ、その側面と上面に石材が組み込まれるような状況を示すのに対し、その両側は谷地形に沿った一段目とその上部の二段目は成層積みを成し、その上段は上面を水平にする。通水口の積み方に独立性がある点は注意される。
・側壁の石材は横幅のある大型のもので、鬼城山城でみられた横幅の狭い石材を側壁に用いるのとは異なっている。天井石の丈夫には水門を構成する石材の中でも最大級の石が存在する。

③讃岐城山城

・排水口は側壁と天井石で構成される。側壁は両側とも横幅のある大型の石材であり、天井石は偏平な石材が用いられている。
・天井石の上部にはさらに２段以上の石積があり、これらの石材には水門構成石材の中でも特に大きなものが積まれている。

○比較

・鬼城山城の高い位置に通水溝を設けるＡ類についてはかねてより朝鮮半島の山城との共通性が指摘されており、構築には渡来系集団の関与があったと考えられている。
・石塁の側面に排水する構造を持つ鬼城山城Ｂ類についても非常に珍しい構築方法であり、鬼城山城独自の工法ともいえる。
・横幅のある大型石材を側壁に用いることは天井石、そしてその上部のさらなる石積を支えるのに必要であり、偶発的に大型の石材が用いられたのではないと考えられる。鬼城山城の水門Ａ類では排水口よりも下部に大型石材を使用されており、水門構築における技術的な差異と捉えることができる。
・鬼城山城でみられたこれらの工法が大廻小廻山城、城山城ではみられず、後者の二城の構築方法に共通点が多く見出される。

⇒鬼城山城と大廻小廻山城という距離的に近い山城同士よりも、大廻小廻山城と城山城という海を隔てた距離的に遠い山城同士に共通点が多い。

４．まとめ

・城門石塁・下部構造の検討から鞠智城、屋嶋城、鬼城山城に構造的・技術的な面で有機的な関連性が見出された。
・水門の構築方法の検討からは鬼城山城の技術的独自性と、距離的に離れた地域間の共通性を垣間見ることができた。

→朝鮮式山城（鞠智城、屋嶋城）と鬼城山城に多くの共通点があり、瀬戸内型神籠石系山城としてまとめられる鬼城山城と大廻小廻山城・城山城は水門の構築技術が異なる。朝鮮式山城と鬼城山城の技術的背景には朝鮮半島系の渡来集団の関与が考えられ、築造時期も近接していた可能性がある。

⇒瀬戸内海の古代山城は屋島城と鬼城山城、大廻小廻山城と城山城に親縁性があり、地域を越えた技術的共通性がある。今後は時期的な関係を考える必要がある。

【論文要旨】

西海道の軍事環境からみた鞠智城の機能

五十嵐基善

白村江敗戦により築城された古代山城は、その大部分が早期に廃止されたことが知られ、防衛体制は大きく転換したと考えられる。長期間にわたり維持された古代山城について、大野城・基肄城は大宰府の防衛が目的であるが、鞠智城が維持された理由は必ずしも明確ではない。鞠智城の発掘成果によると、8 世紀後期からは倉庫施設として機能したことが指摘されている。本研究では、8・9 世紀における西海道の軍事環境を分析することにより、軍事的機能が脱落していく背景を明確にすることを試みる。

鞠智城の機能をめぐっては、対隼人問題との関係を指摘する見解がある。しかし、鞠智城は前線である九州南部とは離れているため、集積されていた米穀を出給していた可能性はあるが、直接的に関与することはなかったと考えられる。8 世紀の対外防衛問題をみると、軍事行動が発生しなかっただけではなく、古代山城を使用しない沿岸警備に転換したことが特徴として挙げられる。9 世紀の新羅海賊問題では、人的・物的被害は発生したものの、大規模な軍事行動に発展することはなかった。そのため、鞠智城は軍事的機能が強化されることはなく、古代山城としての機能は実質的には早期に喪失していたと考えられる。

古代東北の城柵は、蝦夷に対する拠点として機能したが、蝦夷に備える必要がなくなると廃止されたことが知られている。西海道には深刻な脅威はなかったため、軍事的にみれば鞠智城は廃止されるべきであったと考えられる。しかし、菊鹿盆地の高い生産力を背景として、鞠智城は 8 世紀後期から倉庫施設として機能するようになった。すなわち、鞠智城は古代山城として築城されたが、倉庫施設として転用された特殊な性格を持っているといえる。ただし、大規模な軍事行動が発生した場合、鞠智城に集積されていた米穀は軍粮として出給され、軍事的機能を発揮する可能性はあった。

八・九世紀における古代山城の展開と官衙・寺院

清田美季

多くの古代山城が八世紀前半までに役割を終えて廃絶するなか、大野城・基肄城・鞠智城の三城は維持・管理が続けられた。唐・新羅の襲来という差し迫った脅威が去った後の八・九世紀の鞠智城がどのような役割を負っていたのか、本稿では寺院との関係から考える。

大野城では新羅との緊張関係から八世紀後半に城内に四天王を祀る四王寺が建立された。出羽国の秋田城では、蝦夷の大規模な蜂起が起きた八世紀末頃に四天王寺が建立された。また、新羅海賊の襲来が問題視されるようになった九世紀後半には日本海側の諸国に四王寺が建立された。対して、八・九世紀の鞠智城では、城内に仏教施設が設けられた可能性は低く、新羅対策の一環として四天王が祀られた形跡も確認できず、八世紀後半以降の対外的危機は鞠智城の機能に対して影響を与えた要因であるとは考えられない。

鞠智城の周辺には十蓮寺跡と呼ばれる八世紀半ば以降の創建と考えられる寺院跡が存在する。これは菊池郡家と関連の深い郡家周辺寺院として捉えられている。全国的な郡家・東北の城柵と周辺寺院の地理的な関係については、標高差はほぼ無い場合が多く、差がある場合は郡家のほうが標高が高く見晴らしの良い場所に建てられることが多い。対して十蓮寺跡と菊池郡家（西寺遺跡）との位置関係は、十蓮寺跡の標高が高い。八世紀、菊池郡では郡家が整備され、集落も多く形成された。城内で使用される土器の変化から、八世紀第Ⅳ四半期頃からは鞠智城に対する肥後国・菊池郡の関与が深くなったと考えられる。十蓮寺跡は、鞠智城の存在を前提に、菊池郡家から鞠智城へ向かう経路沿いの、見晴らしの良い丘陵上に建立されたものと思われる。

八・九世紀の鞠智城は、対外的な危機に対応する施設としての要素は薄れたが、倉庫などとして地域社会では一定の重要性を維持し続けていたといえる。

古代朝鮮半島と肥後地域の交流史からみた鞠智城

―築城背景と役割を探る―

近藤浩一

鞠智城が築城された当時（665 年頃・７世紀後半）及びそれが再利用された時期（９世紀中葉～後半）の朝鮮半島では、西南地域に唐の熊津都督府、後百済など豪族政権という独立した政治勢力が形成されたが、このことは鞠智城の築城背景並びに役割・機能を考える上で非常に重要と思われる。

さて、鞠智城並びに倭国の古代山城の既存の研究は、当初は唐・新羅連合軍に対する防御施設（大宰府の後背基地を含む）の側面が重視されたが、近年では東アジア情勢よりは倭国史全体のなかで多様な視角から検討されていて、とりわけ鞠智城は対隼人政策・官衙的性格を含む倭王権の地域支配との関係が強く指摘されている。しかしながら、唐（朝鮮半島の熊津都督府）の使節は白村江翌年の 664 年（戦後初）から 665 年・667 年と続けて来倭するが、まさにその年に山城が築城されているのは両者に複雑な駆け引きが存在したとも推定できる。何より鞠智城の研究には、肥後地域と歴史的にも深い交流を持つ旧百済（西南地域）の熊津都督府政権の実体にスポットを当てた研究が必須であろう。

鞠智城の位置した肥後・北部九州は、筑紫君磐井や日羅などに代表されるように６世紀から７世紀にかけての交流の所産によって、半島西南地域からのモノ・ヒト・情報を日本列島のなかで最も早くリアルに体感するところであった。百済滅亡後唐によって旧百済に熊津都督府が設置されると、半島勢力とネットワークを有した豪族は倭国内でもいち早く対処に迫られたが、白村江の敗戦の直後は危機感がピークに達したと考えられる。

それに対し唐の熊津都督府は、白村江の翌年から倭国と戦後処理をめぐる交渉をスタートさせていた。戦後の都督府は、禰軍をはじめ旧百済官人を積極登用して対倭外交にあたらせ、さらに倭人までを傘下に組み込み旧来からの済・倭間のネットワークを活用していた。その中には肥後地域と関わり深い豪族も多く存在したのであった。

とすると、肥後地域と半島の交流史をバックグラウンドに築城された鞠智城は、唐・半島勢力に対する防衛施設の役割はそれほど担っていなかったことになる。鞠智城の機能としてまず重要なことは、白村江直後の緊迫した情勢下で交通の拠点に築かれたランドマーク的存在であって、倭国と熊津都督府を中心に半島勢力の間の旧来からのネットワークを把握することにあったのではないか。したがって、倭国内の山城造営には築城期に対倭交渉を推進した都督府とも何らかの合意があって、山城の機能としては軍事的な側面以上に対外交通の一端（そこには交易拠点も含まれる）を担っていたと考えられる。なお最後に、Ⅱ期（７世紀末・半島では統一新羅成立期）の鞠智城に八角形建物が建立された意義も、676 年に半島を統一した新羅との交流史の中で検討すべきことを提言した。

鞠智城と大宰府

西本哲也

七世紀末、鞠智城は大宰府によって修理が行われた。しかし、九世紀においては、中央への報告は行うものの、管理への積極的な関与は見られない。この変化は、大宰府という組織の地方行政への関与と関係するものであると考えられる。そこで、本稿では地方行政における大宰府の役割を鞠智城などの山城との関わりを中心として検討する。

まず、律令に定められた大宰府の権限を見る。令文に定める大宰府の権限は国司のものと共通する点が多い。それは、唐制を基本としながらも日本独自の事情によって、大宰府の権限が定められたものであることによるものと考えられる。その点を踏まえて山城と大宰府との関係を見ると、基本的に中央か大宰府が山城に関与していた。そして、そのことを端的に示しているのは「筑紫大宰」である。筑紫大宰は軍事上の権限に留まらず、国を所管し行政上の様々な権限を担っていた。その一方、地方官人の銓議権を持つなど、中央の内裏としての側面を持ち、在地の人物をその中に置きながらも中央からの人物を派遣して運用されるものであった。

以上の点を踏まえて、八世紀以降の大宰府と鞠智城について検討する。大宰府は、八世紀においても藤原広嗣の乱に見えるように強大な権限を持っていた。そのために一度廃止されたが、すぐに再度置かれた。八世紀においても怡土城への大宰大弐吉備真備の関与が見えるように、山城には大宰府が関与していた。九世紀においても、大宰府は大野城に対する関与を窺うことができる。この点を踏まえると、鞠智城に同様の倉庫があるにも関わらず、九世紀に大宰府の関与が窺えず、国や郡の関与が窺えるのは鞠智城の変質によるものであると考えるべきであろう。

制度上、大宰府と国とは近い権限を持っていた。しかし、九世紀において大野城などとは異なり、大宰府の直接の管轄から外れたのは、白村江の敗戦や新羅への出兵計画といった対外的緊張の緩和のため、鞠智城は肥後国へと移管されたものと考えられる。

石積遺構からみた古代山城築造技術に関する試論

南　健太郎

古代山城は六六三年の白村江の戦いを契機に、中央政権による防衛政策の一環として、九州から都の周囲に至る各地に築かれた。古代山城は文献に名が記載されている朝鮮式山城、記載のない神籠石式山城に分けられる。文献の研究成果により、朝鮮式山城の築造には、朝鮮半島、特に百済からの亡命官人の関与があったことが知られているが、神籠石式山城については具体的な築造者集団の姿が明瞭ではない。本研究では石積遺構から、古代山城間の技術的な関係性を検討した。

古代山城の中でも鞠智城、屋島城、鬼城山城は城門の床面に通水溝を排することが共通しており、これらの構造を比較検討した。側壁の構造では鞠智城と屋嶋城の共通性がうかがわれ、床面については石敷きがみられる点から鬼城山城と鞠智城のつながりを見出すことができた。城門下部の通水溝の存在が国内ではこの３例に限られることと、このような技術的特徴を共通していることからは、これら三城の築造に有機的な関連性があった可能性が考えられる

また近接する地域に築かれた古代山城においてどのような技術的関連性があるのかについて、瀬戸内に築かれた鬼城山城、大廻小廻山城、城山城の水門構造の比較検討を行った。鬼城山城の水門構造は他の二城にはみられない構造のものであり、大廻小廻山城と城山城は瀬戸内海を隔てているにも関わらず、水門構造に共通点が見出された。

以上の検討結果から、屋島城・鞠智城といった朝鮮式山城と神籠石式山城である鬼城山城の間に、朝鮮半島系の技術が共有されており、このような技術は鬼城山城と近い距離にある大廻小廻山城には取り入れられていないということが明瞭になった。また大廻小廻山城と城山城の水門構造の共通性から、地域を越えた築城技術の系譜関係を見出すことができる可能性を指摘した。

この電子書籍は、第 3 回鞠智城跡「特別研究」成果報告会 発表レジュメ集 3 を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、古代山城がある市町村教育委員会、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：第 3 回鞠智城跡「特別研究」成果報告会 発表レジュメ集 3
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話： 096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：西暦 2022 年 7 月 1 日